

ナガサキの悲劇をオペラで伝える

ほし で ゆたか  
星出 豊さん(73)

1997年の新国立劇場こけら落としオペラ公演で指揮を執った。昭和音大客員教授。日本オペラ振興会指揮者。

長崎県オペラ協会のオリジナル作品「いのち」(錦かよ子作曲)の台本構成、芸術監督、指揮、演出を担う。被爆した看護師の苦悩と命を見つめる3幕。70回目の原爆の

「戦中に生まれた世代の一人として、平和の意味をオペラという総合芸術で伝えたい」  
東京生まれ。東京音楽学校(現昭和音楽大)オペラ研究科修了後、1

969年に渡独し、ニュルンベルク歌劇場の副指揮者を務めた。旧東西ドイツなど、欧州で演奏活動を続けながら、80年代半ばに主な活動の場を日本に移し、地方のオペラ団体の指導にもあたる。同県オペラ協会との関わりは30年に及ぶ。「いのち」の完成には構想から10年以上費やした。台本は被爆者の手記や実際

に聞いた声で構成した。「原爆のシーンで創作したせりふは一つもありません」  
2年前に地元で初演、三重県で再演。今回で3回目となる公演は、7月25、26の両日。40人の管弦楽団と、小学3年生から70代までの80人余が出る。メンバーの大半は被爆2世、3世で、被爆者もいる。音楽教師、音楽大やグリーククラブの出身者が多いという。

「長崎は、教会と寺の鐘が同時に鳴る祈りの街。背負わされた歴史と、登場人物の生き方を通して、命の尊さが心にしみる舞台を届けます」

文と写真・奥村博史

